Cultural Space Quest

あるべき教育の姿をめざす個性的な大学づくり

岐阜県
岐阜市立
岐阜薬科大学
Gifu Pharmaceutical University
設計・監理:(株)梓設計

グリーンハーバルガーデンと2階テラス／
薬草を介した学生や教職員の交流の場。さらに地域の児童や学生の社会学習の場ともなる。様々なコミュニケーションを誘発するため、方向性を限定しない家具を採用。家具を置くことにより人が集まり、そこからコミュニケーションが広がる。
アイネックスアメーバ、アイネックスランドスケープ(縁台特注デザイン)

人と環境にやさしい薬学を、「つなぐ」施設づくりで表現。

株式会社 梓設計
設計室 第1統轄部 副主幹
鈴木 教久 氏
(写真右)

設計室 第1統轄部
古山 博章 氏
(写真左)

INTERVIEW

創設以来78年の歴史を持つ岐阜薬科大学(岐阜市立)は、山紫水明な地域にある。遠くは日本書紀に、岐阜が日本での製薬業発祥の地と記されている。そのような好立地において、人と環境にやさしい安心安全な薬学を意味する「グリーンファーマシー」を基本理念として、薬学専門職業人であるとともに豊かな人間性と倫理観を養うヒューマニズム教育を行ってきた。明確な教育目標と高水準の教育・研究により全国から学生を集め、就職率も高い。さらに近年の医療技術高度化や薬学6年制など教育環境の変化に対応するために、また高水準な創薬医療技術情報の教育・研究をめざして、2009年、国立大学法人・岐阜大学医学部の敷地内に新学舎を建設した。新学舎の設計意図や建築表現について、設計監理を行った(株)梓設計の鈴木氏と古山氏に話を伺った。

新学舎設計のキーワードは、「つなぐ」こと

岐阜薬科大学の新学舎が、岐阜大学の敷地内に建つ意義や大学づくりの可能性はどうなのか、という問いかけから設計はスタートしました。そして、岐阜薬科大学の枠を超えた新学舎づくりを目指して「つなぐ」というキーワードを導き出したのです。「施設と施設をつなぐ」「地域とつなぐ」「人と人をつなぐ」「地球・環境とつなぐ」ことであり、大学のコンセプトは「知的財産を育み、継承する場を未来へつなぐ」としました。

この「つなぐ」というコンセプトを基に、2つの設計テーマを設定しました。一つ目は、国立大学法人の敷地内に建ち、岐阜大学医学部と岐阜薬科大学が連携して進める情報・研究の拠点づくりを建築的にどう解釈するか、二つ目は、大学の理念「グリーンファーマシー」をどう表現するかです。

一つ目の拠点づくりについては、岐阜大学医学部の敷地を見ると、他学部がある東側の「学のゾーン」と、企業との共同研究が想定される西側の「産のゾーン」を結ぶ結節点には、医学部の研究棟や実験棟そして大学病院があって「医療ゾーン」を形成しています。そこを拠点とするために、医療ゾーンの施設群全体を「水と緑の歩廊」でつなぎ、両大学の一体感をつくりました。さらに南北方向の「連携ブリッジ」により各施設を同軸でつなぎ、岐阜薬科大学新学舎を拠点の南玄関にするというキャンパスイメージを想定したのです。計画のシンボルであるブリッジから、キャンパスネットワークが地域へと拡がることを望みました。

「つなぐ」と、コミュニケーションが生まれる

人や薬品への安全性、災害時の医学部や大学病院との円滑な連携などを考慮して、拠点内全ての建物を連携ブリッジによって2階レベルでつないでいます。

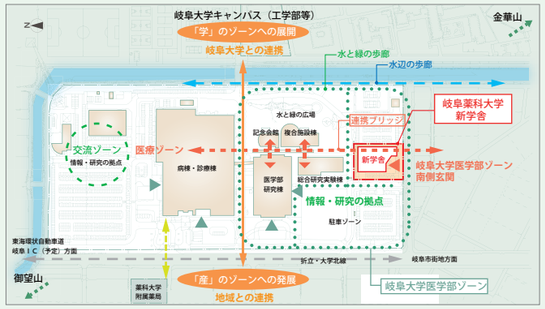
ブリッジには「かけはし」というシンボル的な意味合いもあります。物理的につなぐだけでなく目に見えないものを「つなぐ」ことで、様々な方向に発展してコミュニケーションが生まれます。知的財産も、知識をただ詰め込むのではなく、他の学生とともに勉強するなかで受け継いでいくことに意味があると思います。だから学生や先生のコミュニケーションが大事になってくるんです。例えば各研究室は全く異なる研究をしていますが、その縦糸に、対話や情報交換といった横糸を通せば、研究に新しい展開が生じます。また対話により治療が進められるので、そういった能力が医療・薬学を修める学生には重要であり、日常的にコミュニケーションを誘発する施設づくりをしました。

大学の基本理念を表現した「グリーンハーバルガーデン」

二つ目のテーマ、岐阜薬科大学の基本理念である「グリーンファーマシー」についてですが、薬学や医学は、人が人に対して行う行為で、本来は人間や環境にやさしいものだと思います。これを表現するために、建物の外観は、素焼き風のタイルを使ってやさしい表情を持たせました。そして生薬である薬草をテーマにした薬草園「グリーンハーバルガーデン(中庭)」をつくり、さらに外構も含めて敷地全体を薬草・薬木の植栽としました。また植栽も、岐阜薬科大学の専門の先生と相談するなど徹底して取り組みました。

南西側外観

連携ブリッジ



「グリーンハーバルガーデン」は、コミュニケーションの中心

「グリーンハーバルガーデン（中庭）」は、3階から8階まで吹き抜けており各階から見下ろせます。また2階のテラスまで段状につながる外部空間により、南側へ開放されています。
岐阜大学の敷地内にあるので、岐阜薬科大学としての独自性を併せ持つことも必要です。だから、ここを岐阜薬科大学の学生の拠り所となるミニキャンパスと位置づけて、コミュニケーションや憩いの場にしました。知らない人同士がベンチに腰掛けたときでも、薬草が会話のきっかけになります。薬草はまだ小さいですが、育って植え込みから緑があふれ出てくることを想定しています。

グリーンハーバルガーデンには、できるだけ多くの自然光が必要です。だから、南面の廊下（展望ブリッジ）の幅と中庭へ向けたテラスの配置を検討し、広いガラス面から太陽光をより多く取り込めるようにしました。展望ブリッジは南の市街地側に向いているので、廊下を歩く人は岐阜の市街地を望むことができます。その風景を学生の記憶に残せたらと思っています。

目指す薬学教育・研究のために、独自のフロア構成

グリーンハーバルガーデンを中心に、ぐるりと囲む廊下などで回遊性を持たせています。回遊性は、ものを考えるという意味でも大事です。1～2階には講義室や会議室が集まっています。3～6階は実験室と教授・教官・学生の居室があり大講座ごとにユニットとしてまとめられ、1フロアに4ユニットを基本として設けています。岐阜薬科大学新学舎は研究・実験色が強く、組織として大講座制※を採用しています。基本的なフロア構成は、コミュニケーションの促進を念頭に置いていますので、実験室などを外側に、先生と学生の居室やゼミ室、談話コーナーなどの室を内側に入れて中庭に向けています。7～8階は、創薬医療情報を研究する、岐阜大学との連合大学院等が使用します。

※大講座制:近年、柔軟な教育研究体制の確立を目的につくられた研究組織。

「環境にやさしく、安全・安心な施設づくり」は大学の基本理念

薬品を扱う大学で安全性は必須であると同時に、災害時における施設間の連絡にも配慮して免震構造を採用しました。また環境への配慮として太陽光発電、グリーンハーバルガーデンへの雨水利用を、環境負荷の抑制として地熱利用をするクール・ヒートトレンチ、西側のメカニカルシャフトを外部ルーバとして使い西日の遮断を行っています。さらに雨水貯水槽を設け、大雨等の時に施設に降った雨を蓄え、施設外への影響を最小限にしました。こうしたさまざまな気配りは、環境と建物を「つなぐ」コミュニケーションであり、サスティナブルな面から今後はより大切になってくると思います。

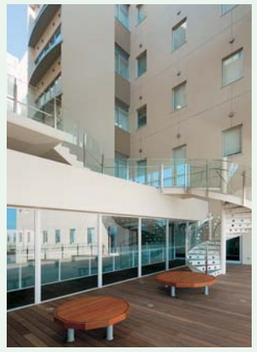
最後に、岐阜薬科大学が地域や市民さらには地球環境へとつながり、大学から発信されるメッセージが、薬草・薬木の緑とともに、教育・研究の枠を超えて地域の健康づくりに生かされることを熱望しています。そして何より、豊かな感性を持った学生が未来へ羽ばたく大学になればと願っています。

2階 第2講義室（150席）／講義デスク・イス:SCF-PF-5505-7（AC・LANコンセント付）、移動席デスク:SCF-PF-5505T（AC・LANコンセント付）、移動席イス:SCF-5505C

2階 大学院講義室／デスク:SCM-750-3T/B、イス:PAG703S-JC

2階 コミュニケーション実習室／ピアネロ（タブレット付）

1階 エントランスホール／アイネックスKシリーズ（特注品）



2階 テラス／アイネックスランドスケープ（縁台特注デザイン）

1階 第1講義室（150席）／講義デスク・イス:SCF-5505-4/PAD2、移動席デスク:SCF-5505T、イス:SCF-5505C

講義室

人が自由に行き交うパブリックスペースとの視覚的つながりをつくり、講義というアカデミックな場を、より身近にすることを意図している。壁材は人肌に近い布風素材が使用され、親近感を感じる空間づくりが心がけられた。また、1階の講義室の壁色を紫色、2階は朱色とし、夜間にガラス面を通して講義空間が浮き出ることで、講義室を外部に向けて象徴化している。
デスクとイスは、講義する教師側と受ける学生側の距離をより近づけるため、前後間隔を調節できるタイプが採用された。用途に合わせたしつらえとし、イスはナチュラルな木タイプ（パッド付）と、ソリッドな樹脂タイプをそれぞれ採用している。第2講義室は情報講義室として、デスクにAC・LANコンセントを装備。

7階 テラス／アイネックスランドスケープシステムWシリーズ

2階 ラウンジ／アイネックスチェアブル　（ガラス越に2階テラス）